

令和7年11月12日

令和7年度 教養教育自己点検・評価報告書：

令和6年度開講科目に関するモニタリングの結果について

教養教育質保証委員会

1. 目的と概要

令和6年度の教養教育の検証について取りまとめた結果をここに報告する。宮崎大学は「国立大学法人宮崎大学自己点検・評価実施細則」にしたがって毎年度1回活動状況の自己点検・評価を実施している。その一環として、教養教育質保証委員会では教養教育科目における教育の適切な実施と学修成果を検証した。具体的な手続きは「教養教育モニタリング実施要領」にしたがって進めた。この検証作業を「モニタリング」と呼ぶことにする。

対象は令和6年度に開講されたすべての教養教育科目275科目である。また、基礎教育科目として開講された88科目も対象とした。教養教育系列部会のうち、課題発見科目群の4つの系列部会（データサイエンス系、人文・社会・芸術系、自然・生命・技術系、地域・国際・学際系）がまず検証を行い、必要に応じて問題状況の把握と担当者への改善を通知した（令和7年8月29日）。

その後、教養教育部門によってFD研修会が開催され（令和7年9月17日）、先の4系列の検証結果報告に加え、情報・データリテラシー、英語（導入科目群）と構想・デザイン系、協働・創造系（未来共創科目群）の検証結果が報告された。また、研修会の後半では報告内容に基づき、参加者の間で意見交換がおこなわれた。

教養教育モニタリングの次の段階として、教養教育質保証委員会は各系列部会の検証結果に基づき本学の教養教育の適切な実施を3段階で判定した。以下、3つのセクションに分けてその結果を報告する。第1は学生によるふり返りに関するものである。検証には学生による授業評価に加え、令和6年度後期から新たに全学に導入した授業ポートフォリオのデータ（学生の回答率38.1%）を用いた。第2は教員によるふり返りの結果である。検証にはFD活動レポートのデータ（教員の回答率73.5%）を用いた。第3は授業科目の実施状況の結果である。成績分布とシラバスを用いて、適切な成績評価の実施、成績評価の方法や授業計画に関する学生への十分な情報提供という点を検証した。

結果はすべての領域で概ね基準を満たし、教育が適切に実施されていることを確認した。また、検証の精度向上のため、授業ポートフォリオの回答率向上と多角的なデータ分析方法の開発が次年度以降の課題であることを確認した。

2. 学生によるふり返り（授業ポートフォリオ）

(1) 判定結果

- ☐ iii：達成水準を大きく上回っている。
- ☒ ii：達成水準を満たしている。
- ☐ i：達成水準を満たしていない。

(2) 判定の理由

1) 学習目標の達成度

<優れた事例>

導入科目・未来共創科目：

- ・「英語の学習を通し、現代社会の課題について知見を広げられたことは、自分の視野と問題意識の養成という点で有意義だった。」（「英語 A3b(学術英語基礎)(1)」）

- ・「情報デタリテラシーと化学系をかけあわせた課題が出され大学生生活 4 年間で過ごしていくための力が身につけられた点がよかった。」(「情報・デタリテラシーT(1)」)

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

- ・「最初から最後まですごく有意義な時間でした。この講義はずっと続けてほしいです。」(「クリエイティブ左脳論」)
- ・「自分の学科では知ることのできないような内容もあって、面白かったです。」(「魚・家畜・草の文化論」)
- ・「この講座を受けることで、自身の預貯金や投資活動、ひいては将来の自分のライフプランの設計に興味を持ち、実践してみようかという意識が生まれた。」(「ファイナンシャル・プランニング講座」)

自然・生命・技術系：

- ・学習目標の達成度が高いと評価した学生が多い。(前期：「環境と生命 (3、10)」 「亜熱帯薬食資源学」、後期：「生物科学」)

地域・国際・学術系：

- ・前期 13 科目のいずれも、達成度は高かった。(達成しなかったという回答は5%未満)

＜達成できなかった点＞

導入科目・未来共創科目：

特になし

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

特になし

自然・生命・技術系：

特になし

地域・国際・学術系：

- ・後期に「必要最低限の達成」とした学生が 10%程度の科目が多かった。

2) 指導の工夫・授業外の学習時間

＜優れた事例＞

導入科目・未来共創科目：

- ・「発表者に対してただ褒めるだけではなく、アドバイスを送るところが高校生の頃と違って非常にためになる活動であった。」(「大学教育入門セミナーE(1)」)
- ・「実際の教育現場の見学がとてもいい経験となった。」(「地域キャリアデザインⅠ (国際)」)
- ・「将来のビジョンを考えるうえで大切になるポイントが多くあり、今後の大学生活の中での学びの意識が変わったと感じる。」(「地域キャリアデザインⅠ (キャリア)」)

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

- ・「0時間」の学生はいなかった。
- ・講義中のグループワークに注力し、同時に学生の負担軽減を図っている。

自然・生命・技術系：

- ・「環境と生命」で学部混成の評価が高い。
- ・生命分野オンデマンド教材で繰り返し学習した。
- ・ディベートが高評価。(「環境と生命 (8)」)

- ・フィールドワーク(鳥の鳴き声)、菌の培養、骨の観察など実体験が高評価。 (「環境と生命(9)」)
- ・授業外の学習時間は、「環境と生命」で1時間から2時間。

地域・国際・学術系：

- ・学習した言語が使用される国や地域の文化について学んだ。(「教養ドイツ語」「フランス語」)
- ・前回の講義で寄せられた質問や感想にしっかり対応していた。(「生涯学習論」)
- ・講義スライドが分かりやすい。(「博物館概論」)
- ・知らない学生同士で話す機会がたくさんありコミュニケーション能力の向上に寄与。(「『私』のキャリアとライフデザイン」)
- ・グループワークにおける異なる学部の学生との意見の交流や共有により、違った考え方・捉え方への気づきが提供された。(「ラーニングポートフォリオ入門セミナー」)

＜達成できなかった点＞

導入科目・未来共創科目：

- ・回答率に改善の余地あり。
- ・1週間の授業外の学習時間が短い科目がある。

データサイエンス系：

- ・授業時間外の学習時間が短い科目がある。

人文・社会・芸術系：

- ・アンケートの回答率に改善の余地が残る。

自然・生命・技術系：

- ・一部科目で講義資料を配布してほしい、音声聞き取りにくい、専門用語がわからない、体調管理や安全面の対策といった指摘、要望あり。
- ・授業時間外の学習時間の不足。

地域・国際・学術系：

- ・講義の中で、宮崎を取り上げた科目の数がそれほど多くなかった。

教育内容の構成を工夫し、さまざまな方法を取り入れることによって、学生の関心を引き出し、内容の定着と学習動機向上が図られていることがうかがえる。

以上から、教育が概ね適切に実施されていると判定する。また、改善することが望ましい一部科目に関しては引き続き動向を注視する必要がある。

3. 教員によるふり返し (FD 活動レポート)

(1) 判定結果

- ☐ iii：達成水準を大きく上回っている。
- ☒ ii：達成水準を満たしている。
- ☐ i：達成水準を満たしていない。

(2) 判定の理由

1) 学習目標の達成度

＜優れた事例＞

導入科目・未来共創科目：

- ・「IT スキルがバラバラな学生がいるクラスで取り残される者のないよう TA に対し事前打ち合わせとチュートリアル動画を配信。」 (「情報・データリテラシーT(1)」)
- ・「毎回の授業でレポート課題を与えた。答えのプロセスを詳しく説明した解答例を毎回配布し

た。復習のため授業動画を WebClass にアップロードした。」(「数学の教え方 T(2)」)

データサイエンス系：

- ・「質問ペーパー」を導入し、学生個々の理解度がより緻密に把握できるようになった。(「数学解析入門」)

人文・社会・芸術系：

- ・「グループワークや各種ワークショップを多用し、学生の毎回の感想メモでも概ね良好な評価だった。」(「ソーシャルデザイン」)
- ・「実務教員による講義と当事者体験を多く含んでおり、意義のある授業になったと思います。」(「障がい者支援入門」)
- ・「身体表現、音楽、美術の異なる分野の視点をからテクノロジーを使った新たな表現やその多様性、また異分野の融合の可能性について学生らと共に考えることができた。」(「アート×テクノロジー×身体」)

自然・生命・技術系：

- ・前期はほとんどの項目について学習目標を達成できたと回答した科目が多かった。

地域・国際・学術系：

- ・前期は 1 科目を除き、後期は全ての科目で学習目標をおおむね達成できたとの回答があった。

<達成できなかった点>

導入科目・未来共創科目：

特になし

データサイエンス系：

- ・初心者向けの文法解説の充実を図る。(「Python プログラミング演習」)

人文・社会・芸術系：

特になし

自然・生命・技術系：

- ・受講者とのコミュニケーションを図る項目と、予習・復讐・発展学習を課す項目で達成できたと回答した科目が少なかった。

地域・国際・学術系：

- ・授業内容に見合った予習・復習或いは発展学習についての項目には、科目によって達成度にばらつきが見られた。

2) 指導の工夫

<優れた事例>

導入科目・未来共創科目：

- ・「他大学教員と企業の 2 名の講師による電気電子に関連する講義を実施。」(「大学教育入門セミナー T(4)」)
- ・「ミニツツペーパーへのコメントを講義ニュースとして毎週フィードバックした。」(「地域キャリアデザイン I (キャリア)」)

データサイエンス系：

- ・講義開始時から全ての授業資料にアクセスできるようにした。(「データサイエンス応用」)
- ・授業時間外での予復習クイズが成績に加味され、かつその得点が遅刻で半減、欠席でゼロになるよう設定しており、オンライン予復習クイズに真面目に取り組む学生が増え、かつ得点を学生本人に都度開示しているのでやりがいにも繋がっているように感じる。(「情報科学」)

人文・社会・芸術系：

- ・「グループワーク時にコメントをしたり、報告会をした後にはコメントを入れている。」(「現代社会と家族」)

- ・「教室で論文、報告書を読ませ、その内容についてグループディスカッションする実践を複数回取り入れている。」（「産業と教育」）

自然・生命・技術系：

- ・受講生全員にプレゼンを課した。
- ・どの学部の学生でも関心持てるよう各学部分野の視点での思考を指導。
- ・最新の研究トピックを取り上げる。
- ・学生主体の授業、学生の相互評価を導入。

地域・国際・学術系：

- ・全学部学生がいることから、どの学部の学生でも関心持てるようグループワークにおいて各学部分野の視点での思考を指導し促した。（「国際化入門」）
- ・地域で活躍している方々を取り上げ、インタビューを学生に見てもらい地域でも十分にクリエイティブな活動ができることを紹介した。（「プレゼンテーション技法」）

<達成できなかった点>

導入科目・未来共創科目：

特になし

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

特になし

自然・生命・技術系：

- ・グループワークがしやすい教室が必要。
- ・発表前に制限時間を明確にすべき。
- ・授業の難易度を考慮し、予習のための資料を提供すべき。
- ・双方向の授業による積極的に参加したくなる雰囲気づくりが課題。
- ・Web コンテンツ利用のガイダンスが必要。

地域・国際・学術系：

- ・土日の集中講義では、学外の施設での見学について開講前にシラバスで予告をしても、学生の所属学部での集中講義等との重複などにより、再調整の必要が生じる場合があった。

教育内容の構成を工夫し、さまざまな方法を取り入れることによって、学生の関心を引き出し、内容の定着と学習動機の向上が図られていることがうかがえる。

以上から、教育が概ね適切に実施されていると判定する。また、改善することが望ましい一部科目に関しては引き続き動向を注視する。

4. 授業科目の実施状況（成績分布アラート、シラバス記述率等）

(1) 判定結果

- ☐ iii：達成水準を大きく上回っている。
- ☒ ii：達成水準を満たしている。
- ☐ i：達成水準を満たしていない。

(2) 判定の理由

1) 科目ごとの履修者数

- ・平均 53.0 人（最多 229 人、最少 2 人）。

2) 系列内における成績分布の適正性

＜達成できなかった点＞

導入科目・未来共創科目：

特になし

データサイエンス系：

- ・「データサイエンス入門」は、オンデマンド教材を用いた遠隔授業科目であり、全体的に高得点になっている。全学生のリテラシーレベルの統一という目標としては良いが、より各自の理解度を評価する方法が必要である。

人文・社会・芸術系：

- ・受講者全員が 100 点となった科目がアラート対象となった。担当教員によれば、少人数クラスで、出席・課題・テストの成績に大差がないことと、交換留学生としての留学条件が適切に考慮されている。

自然・生命・技術系：

- ・前期科目では 3 科目に問題があり、改善する必要がある。
- ・後期科目では成績分布の適正性に問題がある科目はなかった。

地域・国際・学術系：

- ・後期科目については、2 科目の評価が甘い。(ただし、評価が甘い科目は、担当最終年度を迎える年非常勤教員の学生への配慮の可能性がうかがえる。)

3) 同一科目区分における成績分布の適正性

＜達成できなかった点＞

導入科目・未来共創科目：

- ・高評価の常態化がみられる。(「スポーツ科学 IE(3)」)
- ・成績評価が高い傾向にある。(「情報・データリテラシー A(3)」)

データサイエンス系：

特になし(「データサイエンス入門」、「データサイエンス入門 N」に関しては、担当者同士で打ち合わせを行い、MDASH の要件の必要教材は、共通のものをを用いている。)

人文・社会・芸術系：

特になし

自然・生命・技術系：

- ・前期の「環境と生命」26 クラスのうち、1 クラスのみで成績分布の適正性に問題があった。同一科目で成績評価の不平等が生じている可能性がある。早急に改善する必要がある。

地域・国際・学術系：

- ・アラート対象でない科目でも、90 点台が受講生の 40%程度になっている科目が一定数、認められる。(科目の特性上学生の理解度を詳細に把握することが難しいものが含まれるため。)
- ・前後期科目ともに、同じ科目でクラスによる成績評価の偏りは認められなかった。

4) シラバスの公開率・記述率

＜達成できなかった点＞ (2024 年度)

導入科目・未来共創科目：

- ・記述率は概ね 90%以上。
- ・未記入箇所は「判定・成績評価方法」「参考書」に集中。(「英語」「情報・データリテラシー」「地域キャリアデザイン I (国際)」など)

データサイエンス系：

特になし(すべて記述率 90%以上であり、大きな問題は見受けられない。)

人文・社会・芸術系：

特になし

自然・生命・技術系：

- ・公開率は前期・後期の全科目で 100%であった。
- ・記述率が 100%でなかった科目は、前期 2 科目（91%、64%）、後期 1 科目（82%）であった。

地域・国際・学術系：

- ・記述率 100%でないものが 8 科目（いずれも 91%）あった。（公開率は前後期ともに 100%。）

【参考】＜達成できなかった点＞（2024 年度）

導入科目・未来共創科目：

- ・記述率は概ね 90%以上。
- ・「判定・成績評価方法」「授業計画」「参考書」未記入。（「英語」「情報・データリテラシー」「地域キャリアデザイン I（地域）」など多数）

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

- ・記述率は 55～91%と幅があるが、概ね 80%以上。
- ・記載不可欠でない項目も含まれる

自然・生命・技術系：

- ・記述率が 100%に達していない科目が 16 科目あった。

地域・国際・学術系：

- ・1 科目未公開（連携開設科目）であった。
- ・どの科目（33 科目）も記述率 100%に達していない（9～91%）。

5) シラバスにおける授業計画の工夫

＜優れた事例＞

導入科目・未来共創科目：

- ・毎回の授業について目標・テーマ、具体的内容、方法・資料が明記されている。毎回の授業について授業時間外の学修の内容が記載されている。政府のサイトなど参考 URL が充実。（「大学教育入門セミナーE(2)、A(2)」「情報・データリテラシーT(5)」）
- ・オンデマンド教材と授業時間外の学修の関連性と 1 週間の学習活動内容が詳しく記載されている。（地域キャリアデザイン I（キャリア））

データサイエンス系：

- ・高校での「情報」必修化にあたり、本講義と内容が重複する部分を削除し、学生の興味を引くような「実践的セキュリティ対策」を加えた。（「情報科学」アクティブラーニング）
- ・講義だけでなく、授業にグループディスカッションを取り入れて、自分の理解していることを言葉にさせることを心掛けた。（「データサイエンス入門 N」）

人文・社会・芸術系：

- ・分かりやすく、学生の興味を引く科目名と授業概要に加えて、広告・映画制作を基本にした具体的な内容（「クリエイティブ左脳論」）
- ・具体的で分かりやすい授業概要。各回の授業内容は詳細で参考文献の記載もきめ細やか。（「産業と教育」）
- ・興味深い切り口の学習目標と各回の具体的な内容が示されている。（「生命保険論から社会人基礎力を涵養する」）

自然・生命・技術系：

- ・前期：屋外演習を取り入れ環境の生物多様性を調べる。（「環境と生命（09）」）

- ・後期：教員学生協働で行う。（「機械と生活の中のトライポロジー（2）」）

地域・国際・学術系：

- ・前期：2回の習熟度テストの実施。（「教養ドイツ語(1)(2)」）、国・韓国とのオンライン交流のグループワークの実施。（「国際化入門」）
- ・後期：グループでのシナリオ作成とロールプレイ。（「『私』のキャリアとライフデザイン」）、プレゼンテーション実習。（「プレゼンテーション技法」）

＜達成できなかった点＞

導入科目・未来共創科目：

- ・授業計画の情報が極端に少ないものがある。教科書の該当ページ番号、同じ内容の繰り返しなど。その場合、学修目標を毎回の授業においてどのように展開しようとするのか、その方策が学生から見えにくい。

データサイエンス系：

特になし

人文・社会・芸術系：

- ・項目によっては形式的・機械的な記述がみられる。

自然・生命・技術系：

- ・一部の科目で記述率が100%に達していない。

地域・国際・学術系：

- ・一部の科目で記述率が100%に達していない。

成績分布の実態から、教養教育全体として成績評価は適切に実施されていることがうかがわれる。シラバスから、わかりやすい教育内容の提示と展開、また、さまざまな方法を取り入れることによって、学生の関心を引き出し、内容の定着と学習動機の向上に向けた工夫がより具体的に読み取れる。

以上から、教育が概ね適切に実施されていると判定する。また、改善することが望ましい一部科目に関しては引き続き動向を注視する。

5. まとめ

令和6年度に実施された教養教育に関するモニタリングでは概ね適切な教育が実施されていることを確認することができた。また、調査の回答率向上と分析方法の開発が課題であることが明らかになった。

今回は令和6年度に開始した新しい教養教育カリキュラムにおける教育活動を検証するはじめての作業となるため、先例のない試行を多数含むこととなった。検証の方法は引き続き検討する必要がある。そのとき本報告は教育の実態や優れた事例を示す基礎資料として役立つだろう。

以下に各系列部会による総括のコメントを列举する。ここに優れた事例を発掘する意義とともに検証に関する今後の方向が示されている。これに基づいて、このあと各系列部会で改善に向けた活発な議論が進められることを期待する。

＜検証の意義＞

- ・シラバスの充実と公開促進について確認することができた。
- ・アクティブラーニングの実施状況と具体的事例について把握することができた。

<優れた点>

- ・さまざまな学習方法を組み合わせることによって学生の理解が深まる。
- ・全体として成績評価は適正におこなわれている。
- ・LMS を用いて、教員は学生の理解力を把握し、それが継続的な学習を支援している。
- ・教員が「学びの姿勢」について説明することによって学生の興味関心や向上し、積極的に学習に向き合うことになる。
- ・授業科目の学習目標は適切に設定されている。
- ・フィールドでの調査、実験、観察が教育効果を向上させている。
- ・学生と教員による協働、学生のグループワークなどのアクティブラーニングが学生の授業満足度を高める。

<残された課題>

- ・一方通行の講義では受講生が真剣に取り組まず、高い教育効果が得られないと感じているようである。
- ・成績評価において、一部科目で高得点への偏りがみられた。
- ・DP 到達度、学習満足度、学習環境満足度、学習時間について授業ポートフォリオのデータを分析する必要がある。
- ・授業時間外の学習時間を充実させる工夫が求められる。
- ・優れたシラバスの判定基準の明確化。
- ・消耗品費等の支出による教員負担の軽減。
- ・学生アンケートの回答率を向上させる必要がある。

6. 根拠資料

- ・国立大学法人宮崎大学自己点検・評価実施細則
- ・宮崎大学学び・学生支援機構教養教育質保証委員会細則
- ・教養教育モニタリング実施要領
- ・宮崎大学学び・学生支援機構教養教育系列部会要項
- ・令和6年度 前期・後期系列部会によるモニタリングについて（依頼）
- ・令和6年度 課題発見科目に関する検証結果総括：データサイエンス系
- ・令和6年度 課題発見科目に関する検証結果総括：人文・社会・芸術系
- ・令和6年度 課題発見科目に関する検証結果総括：自然・生命・技術系
- ・令和6年度 課題発見科目に関する検証結果総括：地域・国際・学際系
- ・令和6年度 課題発見科目に関する検証結果総括：導入科目・未来共創科目
- ・令和7年度 教養教育FD研修会報告書